

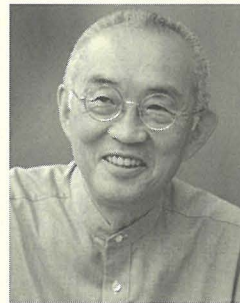
国家は統治できても 自然は統治できない

かつて治水は治国であった

人間は過去一万年間に千倍という異常な増加を達成したが、その原因は人間に必要な物質を自然から収奪する技術を手の中にしたことである。その収奪は、地球の歴史からすれば一瞬という数千年間という時間で、鉱物資源も化石燃料も森林資源も枯渇させるほど急激な速度で増加し、環境問題の主要な原因になっている。唯一、枯渇しない収奪の対象は淡水

であった。それは淡水が地球の表面で循環している物質だからである。

ただし、枯渇しない淡水には治水という課題が存在していた。古来、治水に成功した人物が国家を統治するという言葉があるほど、この技術は社会を維持するために重要であった。中国では四〇〇〇年以上前の堯帝の治下で治水に能力を発揮した大禹という技師が後継の皇帝となり、古代メソポタミアには「偉大な神々の下命によって国王は運河を建設



東京大学名誉教授
つきお よしお
月尾嘉男

し、その流水によって権力を維持した」と記録した石碑が残存している。
自然制御がもたらす
マイナスの連鎖

治水と治国が直結するのは古代だ

けの法則ではなく、現在まで継続している。世界最長の大河ナイルには五〇〇〇年前の古代エジプト第一王朝のときに世界最初のダムが建設されたとされているが、それから五〇〇〇年後の二〇世紀後半、エジプトの第二代大統領ガマル・アブドゥル・ナセルは河口から一〇〇〇キロメートル上流に治水と利水を目的に、現在でも世界三位に位置するアスワンハイダムの建設に成功し、国威を発揚した。

ところが、このダムによって汚泥の流下が遮断され、何千年間も肥沃であったナイル河口の農村地帯は大量の肥料を必要とするようになり、到来する土砂の減少の影響で河口の村落は海中に水没し、魚類が減少して漁業は壊滅するという結果になり、最後には塩分の蓄積が毎年洪水によって洗浄されなくなり、農業さえ存亡の危機に直面するようになった。

一個の巨大ダムを発端としたマイナスの連鎖が地域を衰退させていったのである。規模は相違するものの、日本でも

同様の事例は数多く存在する。ダムを建設すると河口まで土砂が流下しにくいために海浜が減少する。そこで人工海浜を造成すると、魚類の生態が変化し、漁礁を投入する事業が必要になるという土木事業の連鎖になる。これらの事例が示唆するのは、一見すると技術は自然の制御に成功したかのようであるが、それは自然の循環を遮断することであり、結局は人間の敗北という結果になることである。

自然の循環を遮断する文明

そこで注目されるのが自然を利用した緑色ダム（森林）や白色ダム（降雪）による治水と利水である。ところが最近、国内各地の森林や原野が海外の資本によって買収されていくという現実が登場した。日本の林業は、海外の安価な木材の影響で経済の視点から成立しない事態となり、相場の何倍かを提示されれば、当面の利益で森林を売却することになり、それを非難することはできないが、これは自然へ重大な変化をもたらしかねない。

その森林が木材目当てで一気に伐採されれば、地域の淡水の循環は急速に変化する。メソポタミア平原には人類の最初の都市がいくつも登場し、チグリスとユーフラテスの両河を治水して灌漑農業が発達し、当時の世界でもっとも繁栄していた。現在、それらの都市は砂漠に埋没した遺跡となっているが、当時、一帯は世界で有数の杉材の産地であった。地球規模の気象変化も影響しているが、人間が自然の循環を遮断した結果である。

現在の便利で快適な文明社会を維持している源泉は化石燃料と総称されるエネルギー資源であるが、それは地球に入射する太陽エネルギーの〇・〇一パーセントでしかない。地球の表面で水分が蒸発し、降雨や降雪として落下し、河川を流下していく循環は、すべて太陽エネルギーの恩恵である。

治水という名目によって、その循環を遮断することは無謀な行動だということを歴史から学習してはじめて、人類の長期の将来が展望できるのである。